

## アウト・リーチ技法を使うスクールソーシャルワーカー の展開についての一考察

阿 部 正 孝

### はじめに

児童の問題として、1950年代の「どもり」から不登校、家庭内暴力問題の経過を経て、2000年代の「苛め・自殺」問題に至るまで、その間、児童の問題が時代とともに変容してきた。そのなかで筆者は不登校児童と接する機会が多く、ソーシャルワーカーとして支援を行ってきた。この不登校は我が国特有の問題であり、1960年代から一気に増加している。2001（平成13）年は文部科学省の調べ（年間三十日以上欠席者で病欠でないもの）では約十四万人おり、一次僅かに減少したものの、2006（平成18）年から再び増加傾向にある。我が国のみが不登校問題を依然として論じ続けなければならない背景は何か？ そこにある日本の問題は何か？ それらを検討することで、子供を取り巻く環境が浮き彫りにされるのではないかと白橋（元仙台国立病院院長）<sup>1)</sup>は指摘する。我が国ではまだ馴染みは薄いですが、子どもの問題に関わる方法として、スクールソーシャルワーク<sup>2)</sup>という方法がある。日本では歴史がまだ浅く、1986年に埼玉所沢市で試験的に行われた山下英三郎の実践が注目され、その後、兵庫県、香川県、大阪府など地方自治体で独自に展開されていた程度である。

### I 「スクールソーシャルワーク活用事業」が導入されるまで

#### 1) スクールソーシャルワークの類似概念

日本でスクールソーシャルワークをはじめて理論的に唱えたのは、スクールソーシャルワークを『学校社会事業論』と訳した寺本喜一と、『学校福祉事業論』と訳した岡村重雄が上げられる<sup>3)</sup>。寺本は長期欠席児童を対象にして京都市の夜間中学の調査を行い、学校社会事業成立可能仮説を発表し、訪問教師及び学校社会事業主事の配置の必要性を訴え<sup>4)</sup>、岡村は地域社会との共同関係、学齢期の児童福祉機関や、その両親の為の、地域の社会資源の利用や連携が不可欠であり、スクールソーシャルワークは学校と地域の連携を図るものと述べた。しかしながら、当事の「学校社会事業論」や『学校福祉事業論』は対象が現在のような多様なニーズ、多様な価値観への対応を目指していたものではなく（状況選択としてはあったのだろうが）、実際には貧困家庭やコミュニティの中で溶け込むことの出来ない家庭を対象とされ、その支援は養護教員や担任の教員でス

クールソーシャルワーカーの任務がまかなわれていた。

## 2) スクールソーシャルワークの始まり・視点

文部科学省では1995(平成7)年の心理職のスクールカウンセラーに続き、本年2008(平成20)年より『スクールソーシャルワーカー活用事業』を導入し、これまでに行ってきた心理職との連携の他に、本格的にスクールソーシャルワークの活用を始め、福祉職との連携を教育界は目指すこととなった。

この制度の導入については、2006(平成18)年5月に文科省調査研究会議の「学校等における児童虐待防止に向けた取り組みについて」(報告書)の中でスクールソーシャルワーカーの海外の取り組みや日本の事例を紹介し、『スクールソーシャルワークは一つの選択肢として、少なくとも、論議される課題といえよう…新たな視点と方法を導入することによって、既存の施策を活性化することに寄与しうることは言える』と報告され、この報告が契機になり、本年度(2008年)に『スクールソーシャルワーク活用事業』としてはじめて福祉部門がスクールソーシャルワークという形で教育界から認識されはじめることとなったのである。

今回の『スクールソーシャルワーク活用事業』においてスクールソーシャルワーカーの介入が求められる具体的な問題は、学校欠席問題・コミュニケーション困難・発達障害・家庭内問題・性的問題など多岐に渡り、総じて子どもの学習を妨げ、校内において達成感や成就感を感じるものの出来なくなっているものとされている。

ここで求められるスクールソーシャルワーカーの専門性は個人と環境の両者に働きかけを行う事にある。具体的には困っている親子の生活と環境に焦点をあて、周囲の状況や問題が表面化するまでの過程を考慮にいれ、カウンセリング、関係調整・仲介・連携・権利擁護などの援助とサービスを行う事<sup>5)</sup>と解釈できる。

今日考えられようとしているスクールソーシャルワーカーは、個人を取り巻く環境を視野に入れた支援に焦点をあて、問題を抱えているその人自身に焦点をあてるものではない。取り巻く環境を含めたトータルな視点で考える。つまり抱えている問題だけを解決するのではなく、それらがおこる原因や理由等も全て含めて支援する<sup>6)</sup>ものである。つまり、個人への働きかけ以外、問題の背後にあるもの(家族や教員)へのコーディネート<sup>7)</sup>であったり、コンサルテーション<sup>8)</sup>であったりする。

本研究では、仮説として『スクールソーシャルワーカーにはアウト・リーチ技法が効果的である』として、学校場面や生活場面に赴きアウト・リーチ技法を用いて、不登校問題の背後にあるものに視点をあてた。

## II 事例に見るソーシャルワークの展開——アウト・リーチを中心に——

ここに報告するのは、人口6万人規模の農漁村中都市の比較的開発されつつある地域郊外にある学校で起きた長女の不登校を主訴とし、保健室登校も出来ず、適応教室にも行けずに自らの部屋に閉じ籠った児童を持つ母親に対する援助過程である。筆者（援助者）はその街にある精神科病院に30年間PSWとして働き、精神障害者の社会復帰を担当し、現在大学において5年目の教員をしている。初めて不登校らしき児童と対面したのは1976(昭和51)年で初診には“うつ病”と診断された中学2年生の女子児童が、筆者の面接で「学校が怖い」と訴えた時から、思春期問題に関心を持ち、精神科病院に勤務している頃には約60症例くらいの事例を担当した。現在でも毎週土曜日、日曜日に地元で2例の不登校児童（内1名は強迫神経症を伴っている）担当している。筆者は現代日本社会の子どものあらゆる問題に不登校・摂食障害・いじめなどがあり、それらは「成長のつまずき」であり、『歴年齢に求められる社会集団』に参加出来ない者の増加と理解している<sup>9)</sup>。これらの問題に悩む母やその家族、本人、その学校に対しアウト・リーチを行い、支援のあり方について若干の考察を試みる。

### 事例〈不登校を起こし、母親に反発する長女〉

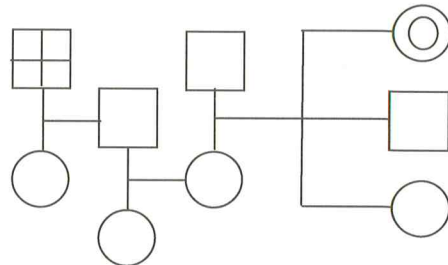
本事例は現在も継続中であり、その匿名性を守るため、この報告では本質を損なわない程度で変更を加えて記載している。

#### 1) 事例の概要

対象者：長女および母親

主訴：長女の不登校，家族への離反

家族構成：母方曾祖母，母方祖父，母，父，母，長女（不登校），弟，妹の8人家族



#### 2) 来談経過（初回～3回）

母親からの依頼で来談が開始される。長女が不登校に陥り、それに対する祖父母（母にとって「両親」）の態度や、学校への対応に悩んだ母が友人を介し、筆者に相談に来た事が契機となった（初回）。母としては「学校に行ってもらいたい」と再登校を切望し、登校刺激を試みたが、不登校を繰り返す長女から反発され、再登校につながらず、「毎日に悩めます」とのこと（3回目）。

#### 3) 問題の概要

長女は現在中1。小6時の夏休み後の二学期から登校しなくなった。その後、学級担任や学年主任と両親が、長女への対応状態について話し合いをしたが、不登校の状況の認識をめぐる両親と

学校側の対立があったり、不用意に登校刺激を加える祖父母からの揺さぶりなどがあつたり、両親と子どもの混乱が続いた。そのような状況のなかで長女は断続的な登校を繰り返しながら小学校を卒業する。

中学校に入学して、当初、登校意欲が見られ、家庭勉強などもしたが、3日間くらいで頭痛、のどの痛みを訴えてからは、さみだれ的な登校傾向が見られ、5月の連休後から本格的な不登校の状態が始まった。学校側は異変を感じていたが中学校の担任は「ゆっくり時間を取れず、なかなか時間が合わず本人と話す時間も少ない」と申し訳なさそうに言いながら心配する。中学校の担任は本不登校のケースについて、家族との連携の必要性から、積極的に母と電話で連絡をとりあい、状況の理解に努めたようだ。しかし、今度こそ登校してくれると期待していた両親は、学校に行かず、再び家庭に閉じ籠ってしまった長女の状態を目の当たりにし、学校側の要望に対して、適切な対応が出来るかどうか自信を失っていった。一方、祖父母は不登校にネガティブな態度をとり、長女に「学校に行け!」などと登校刺激を与えたり、長女の一日の生活のあり方に苦情文句を言ったりして、長女の不登校状態を契機に家族全体の一体感が見られなくなってしまった。それにより、両親と祖父母のそれまで表面化しなかった問題も顕著になり、家庭全般の不協和音が、混乱に拍車をかけることになる。

憔悴した母は筆者との定期的面接で、長女の不眠、昼夜の逆転など生活の変貌ぶりも「苦しい」と筆者に訴える。憔悴しきった母と仕事に多忙な父の状況から、筆者が家庭と学校との間に助言や情報提供のためのコンサルテーションとして介入することが両親から求められ、その必要性から学校訪問をしたり、家庭訪問をしたりして調整を行った。その経過を辿る。

#### 4) 家族状況

父：仕事は団体職員。多忙な仕事で帰宅が遅く、多忙さからエネルギーを外で使い果たしてしまい、又、婿としての気を遣う生活も続いており、疲れ果てて帰宅するものの、今回の長女の不登校を心配している。

母：看護師。三姉妹の二番目。父が権威的で酒好きのため姉と妹が地元を早くから離れたため、母は親の面倒を自分が見る覚悟で、地元の看護学校に入り地元の病院に入職。時間的に不規則な勤務状況であるが、夜勤明けなどで日中家にいる時は長女の相手をするなど子育てには懸命である。飲酒により権威的になる祖父や、長女に干渉気味の祖母に不満を持っている。

祖父：建築業。職人気質で近隣との付き合いを大切にし、酒を飲む機会も多い。曲がったことは嫌いで長女（孫）の問題については最も気にかけている。以前は飲酒の上、祖母（自分の妻）や母に暴力をふるっていた。

祖母：家事で精一杯の印象。孫の問題を近隣の知り合いや、孫と同級生の家に行って、話しをすることもある。



曾祖母：高齢で自宅養生。

弟：小5の弟は小学校の先生や母の報告では不登校傾向かと思わせる仕草もあるようだが、学校欠席は1日から2日にとどまり、他は変わりなく学校生活を送っている。特記事項なし。

妹（5歳）特記事項なし。

休日など、両親は子供たちのみで出かけたり、食事をしたりして祖父母と子ども達の避けるような生活をしている。家庭内でも世代間の会話は少ない。祖父は“アルコール中毒”を疑うほど飲酒し、暴力に及ぶくらいの酩酊状態が絶えず見られる（母談）ため、各人は食事などが終わると、自室に戻ることが多い。又、常日頃より、長女に登校刺激を加える祖父母の考えなど、平素の生活のストレスや不登校に関する認識の違いなどで、祖父母と両親の間で「ずれ」が生じており、互いの疎通が良いとは言えない。

## 5) 処遇経過

### ① 小学校在学中の支援

#### 〈2学期の支援〉

#### ● 母の混乱期（4回～8回より）

小学5年生の2学期あたりから長女が登校をしぶりだし、小6二学期から本格的に学校を休み始めた。長女にどのように対応をしたら良いか悩んでいると母が来所時の話し（4回目）。長女が登校しぶりの初期に、小学校に相談したが、学級の担任からは「学校にいるときは普通です」と言われ、母は我が子の不登校の原因がわからず困ってしまったと訴える。又、「学校を休む時には必ず連絡をほしい」と言う割には（学校側の）積極的な支援方法が見えず、「毎日の学校への連絡も疲れます」と母は心情を吐露する（休みが続いている長女のことでは母は学校に申し訳なさを感じている印象）。

自分の夫に相談しても、仕事が忙しく「仕方がない」ということで片付けられ、祖父母は長女の不登校に「躰が悪い」「何故、学校に行けない？」と不登校の状態に否定的な態度をとられることが辛いと訴える。我が子の学校に行けない問題を母が「何とかしなければ…。」と一人で悩んでいる状態が続いている。

母と長女が揃い、筆者とで来談。長女は頭や腹が痛くなる時あり、体調が悪くて学校にいけないこと。家の中にいるとイライラして祖父母とうまく付き合えないことなど話す。比較的淡々とした表情でいたが、次第に自分の話しが出来るまでは、質問に対し涙ぐみ、言葉数が少なく、要領の得ないところも見られたが、時間の経過と共に登校問題以外、自分のことは話せるようになった。母は小柄で落ち着きのない態度で、長女と筆者の間を取り繕っているという印象。

母からは「毎朝学校に欠席の連絡するのが辛い」との言葉があり、母の負担を軽くすべく、筆者が学校と連絡をとり、母の混乱を電話にて紹介し、長女が登校するときに家族から連絡することで良いか提案した（クラス担任了解）。その後、父にも家族一丸となり対処しなければならない

ことを説明した。父親からは「父としてやれることは何でもやりたい」との返答があった。(5回目)。実際その後、非常に協力的になった。

また、「このまま欠席が続いたらどのように対応したら良いか」という母にとっての緊急解決課題に対して、母が長女に代わって物事を決定したり、母が考える意義あることを指示しようとしたりせず、どんな些細なことでも長女の意味を尊重するよう指導した。

やがて、筆者とのエンゲージメント<sup>10)</sup>が確立される頃から、母も次第に時間的経過や、事実関係を話せるようになった。それによると学校生活はそれまでしっかりした頼りがいのある生徒で、学芸会には主役をこなし、学校行事も意欲的に行う“誉められることの多い子ども”だった。友人は数人の決まった人との付き合いのみ。同級生から「出来の良さと、先生からの受けの良さ」を友人からねたまれることもあったこととのことであった(6回目)。

長女に休み始めの契機について問うも「判らない」と力なく言う。曖昧な部分を残しながら、学校生活のことについて尋ねると「小学5年生の時、ジャングルジムから落下して保健室で休んでいた」が、養護の先生から「クラスに戻りなさい」と言われ、それ以来、保健室に嫌なイメージを抱き、「保健室にトラウマがある」という表現で自ら話す。体調については「(休んでいても)いつも学校のことを考えて、肩が凝るし、疲れる」とも話す。

本人より、「トラウマ」のことについては学校には言わないでほしいと希望あり(8回目)。

#### ● 長女の家族への依存・攻撃(9回～12回より)

面接10回目頃から、「眠れない」「自分の部屋にすることが多い」といった問題点が出現。母はそれに応じて夜に一緒に寝たりしていることが話される。

長女より話しから、学校のことや家族のことを語られ始めた。友達から「どうして学校に来ないの?」「家で何をやっているの?」と聞かれるのがつらいこと、母に対しては「どんなときでも何を聞いても同じ態度だ!」「お母さんはいつも説教調で、話しの途中までしか聞かず、先に何でも判ったように言ったり、注意したりする」という話が出る。祖父母のことも「将来呆けても面倒を見ない!」と祖父母への怒りを強調する(実際、母からは、家で祖父母は学校を休んでいる長女の生活をだらだらした態度と見ており、長女がテレビを見てばかりいることに対して、祖母はイライラして、祖父母と母は衝突している、と家での状況を打ち明けられていた)。筆者が「お父さんは?」と聞くと、「不機嫌のときがある(学校に行かないことにあからさまに不満の表情を示すという)」と返答がある(11回目)。

その後、冬休みに入る前に筆者から、両親に対して、本人の気持ちをやわらげるためにも不登校の状態をネガティブに見ないことを前提に、家庭、学校間の認識と対応とを一致させることを目指し、各機関の調整が必要になることを提案する。早速、学校と了解をとり、家庭と学校の共通理解のための話し合いの場を設け、学校訪問を行う(小学校アウト・リーチ<sup>11)</sup>1回目)。担任が対応し、筆者を含めて校内で話し合いが出来た。しかし、学校側からの具体的な方策が見られず、筆者が積極的に示す以外、新たな方針は出なかった。両親が担任のみの対応に不満そうな印象を

もつ一方、筆者の具体的な動きに、両親はこれまで以上の期待を膨らませ、「学校と今後も話したい」と、それまでおどおどするのみであった母から積極的な姿勢が見受けられるようになった。その頃、次の課題が見えてきた。

- 1 学校には必要な情報が入っておらず、次善の策がなく困っている。
- 2 両親は不登校の状態に悲嘆し、具体的対応を指示してくれない学校に不満をもっている。特に、母は子育てに罪責を持ち、孤立感、無力感を感じている。
- 3 長女本人は学校の先生や、友人、母との良好な関係を維持できずにいる。

等であった。

従って、これらの状況の改善策として、① 学校の役割は「見捨てていないメッセージ」を本人と家族に持たせることとともに、家庭からの本人の情報を把握すること。② 母親に教育相談的対応を学校と筆者が行うこと。③ 本人が抱えている不登校への罪悪感や、それに伴う緊張などを気持ちをやわらげるためにも、不登校の状態をネガティブに見ないことを前提に、家庭、学校間の認識と対応を一致することを目指し、今後とも各機関の調整が必要になることを確認する事を提案し、取り組んでいくことにした。

### 〈3学期の支援〉

#### ● 卒業前の学校との本格的な話しあい（13回～20回より）

3学期が始まり、母、長女で来所。冬休み中は友人とも遊び、家族で温泉に行ったという。祖父母は行かなかった由。両親、弟、妹の5人で行き、楽しんできたことを母は淡々と話す(13回目)。長女は3学期が始まって登校には至っていない。

1月の末に学校訪問（小学校アウト・リーチ2回目）。学校側は学級担任・学年主任が対応。学校側も了解。1回目と違い、学年主任が同席し、両親の話を聞く。両親は余り、変ってない学校の状況に「学校でもう少し、家族との連携をもっていただきたい」と再び訴える。

この頃、16回目の面談から、長女より、不眠の訴えが見られ、弟妹へのきつい態度も表れる。登校については「(学校に)行ったら具合が悪くなっても帰って来れない」と身体的に自信のない自分を心配している様子。

2月、学校の希望により、両親、筆者とて話しあいのため学校訪問（小学校アウト・リーチ3回目）

両親、筆者を校長・教頭・担任・学年主任が対応。卒業の件も含めて、本人の状況確認と今後のことについての話し合いと学校側の希望あり。学校では本人の状況を詳しく確認したいとのこと。筆者よりこれまでの本人の身体症状、学校への不安、家族の混乱を説明する。

学校として卒業式を控えているが、家庭とより密な連携を希望し、校長は「協力できるところは協力する」と…。

この学校が希望する話しあいは、疎遠関係になってしまった家族と学校側の関係修正を目的と

した面が強いという印象を受けた。

3月上旬、両親・長女が来所したが、母が体調を崩しており、元気がない。

卒業式の件で、先生から電話があったが、一向に本気にならない長女に不安を持っているようだ。卒業式の練習は「家でも出来る」という本人の言葉にも母は心配している。

卒業式について、母は参加を希望するが、長女は「とりあえず（卒業式のことは）考えてない…行くと思います」と筆者に話す。

最近の気持ちを長女に尋ねると、長女は「父さんと今日、口争いをした」と話した。朝、父から「起きろ」といわれ、自分が寝ているところに父がずっと座っていた。仕方がなく起き、腹が立ったので仕事に行く時、「『帰ってくるな!』言っちゃった」と下を向きながら筆者に訴える。母に対して「お母さんの口のうるさいのは減った」という。

母に本人の最近の印象を聞くと「この一週間、家事仕事は快くやってくれている。以前は手伝いを頼んでもぐずぐずして仕方なくやっていた。(母の仕事が)夜勤があるので助かります」と本人の変化について認めている。

筆者から見ても、これまでの長女と比べると自分の感情を表面化が出来ている印象を受けた。

その後も19回目の面接の頃から長女の話し方が滑らかになってきた。「眠れない」と言いながら母と二人で温泉に行った話や、「卒業式のこともあるので、学校に行こうと思っている」と言う。また、涙を流しながら、曾祖母・祖父母が「学校に行け」とばかり言うので、「将来面倒をみない」感情を露にだす。

長女は母と楽しんだり、父や祖父母に対するこれまで溜まっていた自分の気持ちを表すことが出来るようになり、母も長女の気持ちを汲めるようになり、行動を共にし、それまで困ってばかりいた状況から一歩進んだ印象を受けた。そのような不安定な感情を持ちながら、3月19日の卒業式に出席したこと。その前日にも登校して卒業式の練習に参加したとの説明があった(20回目)。

今後の方向として、中学入学以前における課程での役割は、父がある程度長女との話し合いを持つこと、母は祖父母の長女に対して、強い登校刺激を避けるように説明し、長女の不安な気持ちに理解をもらうこととする。

## ② 中学に入ってから支援

### 〈1学期の支援〉

#### ●新天地での挑戦(21回～23回)

面談の折、中学入学後、「中学は楽しい」「入学式にも出席した」(21回目)と母と長女で話す。母は「一週間に何回か休むことがあっても、元気に登校している」こと、朝に「起きたら自分で弁当を作っている」こと、帰ってきては「宿題や勉強を3時間くらいやっている」ことを筆者に説明する。長女も「頑張っている…」と言う。



筆者から、学校適応はもう少しゆっくりしたペースでも良いことを説明すると、長女は「家に帰ってからの勉強していることの証明が必要です」と言い、母は「家でやらなければならない学習の目安があるらしいです」と学校の決まりをしきりに言う。

4月は調子が悪くとも連続的な休みは見られない。又、小学時代に「トラウマです」と言っていた保健室へのイメージの悪さは、中学の保健室にはなく、「学校で体調悪くならない?」と筆者が問うと、「保健室に一度行って休んで、ある程度してからクラスに戻ります」と抵抗感は見られない。(22回目)。表情、言葉に生き活きとした様子が伺われ、何とかさみだれ的な登校をしながら、新しい環境になれるように努力している。頑張り過ぎる不安もみられる。さみだれ登校だが、両親は、「以前より学校に行っている」ことに安堵している。両親に祖父母の状況を伺うと、相変わらず酒を飲みながら、嫌みを言うことが多く、食事が終わると、互いに自分たちの部屋に戻り、家族の団欒はないような話である。父によると「(祖父母は)学校に行ってるほうを認めないで、休んでいるほうを悪く言うんだよね」と説明あり、家族がこの問題に協力一致している印象はない。祖父母のネガティブな態度が伺われ、長女も祖父母のこれまでの批判的な態度に対して警戒を持っているだろうと母は言う(23回目)。

#### ● 祖父母との関係・長女の二次反応に揺れる母(24回～30回目より)

母より事前にTELあり、長女は最近、「学校にまったく行かず、夜に眠れていない」ことの報告あり。

母・長女の来所時、母は疲れきり、長女は無表情。「連休は子ども達と泊りがけで遊園地やショッピングに行ってきた。帰ってきたら、祖父母から『学校に行かないくせに…』と言われ、それ以来、休むことが多くなり、現在(5月中旬)は部屋に閉じ籠り、昼夜逆転し、全く学校に行っていない」と…。その間、祖父母と両親の溝が益々深くなり、両親は祖父母に対しての金銭的な援助を減額したり、必要な経費を無視したり感情的態度が目立つようになった。父も祖父母に対してこの頃から明確な反発を表面に出すようになった。母の怒りが最高潮に達したのは、祖母が二階の長女の部屋に行き『どうして学校に行かないのか?』と無神経な祖母の態度(母談)に感情が高ぶり、母が祖母の顔を殴ってしまった時などで、その様子を涙ながらに筆者に説明する。又、長女が祖父母のいやみの言葉(母の表現)を気にして、「殺してやる」「今に復讐する」と口走っていると心配そうに語る。長女は無言のまま涙を流すのみで、学校に行けないことについての具体的な質問に対して長女から話されなかった(24回目)。

その後、長女は「面談に行きたくない…」とのことで、両親、あるいは母のみの来談が続いた。長女は「昼頃起きて、夜は眠れてないようだ」と母の言葉があり、日常生活は弟、妹の世話をしたり、学校から友人が届けてくれるものに見たりしているようで感情的な行動・態度はないと言う(26回目)。

最近「(本人の希望する)カラオケやショッピングなどに行っていない」と母は言い、仕事と家事をやることだけで疲れ果てている。この頃から、四月に転勤した多忙な父が連休後の長女の異

変から再び母と共に話し合いをするようになった。

6月初旬、母より筆者にTEL。「(長女が) 部屋に引っ込んで『死にたい、消えてしまいたい』、『あんた(母)は私の気持ちをわかってない』などと言っています」「『部屋に鍵がほしい』とも言っています」と早口で語り、母の心が揺れている。「話しを聞き、説得したりしますが『予想したとおりの返事だ』」と長女は聞き入れず、素っ気無い返事で忠告を聞く様子はないと言う。

両親来所。「その後、大きな問題はありません。(長女には)好きなようにさせてます。(祖父母は)一番下の子(妹)を可愛がっていますが、それ以外には声をかけてないです」と母は言う。父は祖父母の行動に対する不快感と、不安定な現在の家庭状況は「止むを得ない」といい、母の気持ちにねぎらいも見られる(30回目)。

### ● 行動の連携のためのアウト・リーチの開始(31回目～35回目より)

クラス担任よりTELあり、担任によると、「最近すっかり学校に来なくなり、友人にお願いして文書などを持たせているが、登校の兆候も見られない。どのように対応をしたら良いか」の問い合わせがある。学校としては家族に「電話をして、ラポールをとってるが、それだけで良いかどうか…」「実際には、(学校でも)中々時間が合わず、本人と話す時間も少なかった」とこれまでの経過の報告あり。

筆者より担任に家族の状況を説明する。その他、両親に電話をもらうこと、中学校の保健室の対応について本人は不安はなく、両親も好意的に思っていることを伝え、互いの不登校に対する共通認識と今後の方向性の話し合いが必要であることを提案する。学校に訪問したい旨を伝える。クラス担任も了解してくれた。

7月初旬。両親が(長女が)眠れないときには一緒に添い寝をしたり、話しを聞いたりしているが、深夜2時～3時頃に及ぶこともしばしばとのこと。祖父母とは食事以外、接点がなくなっていることや祖父の酒量が増えてきていることなど報告あり。筆者より学校側からTELがあったことを両親に報告。今後学校と連携し、共にやっていきたい事などを説明する(31回目)。

親として当面の心配は何かと問うと、「(長女が)不眠のため、精神科クリニックの診察を受けさせたい」と母より希望あり。以後、一ヶ月に一回の割合でクリニックに通院している。そのときに臨床心理士のカウンセリングも受けるようになった(33回目)。

母と共に学校訪問(中学校アウト・リーチ一回目)。教頭、学年主任、担任と話し合う。

当面の状況の通院していること、薬を服用していること、友達と時には遊びに出かけていることを報告してから話し合いをする。

内容は①母から長女の家庭生活の状況説明、②筆者から不登校児童への対応の基本原則の説明<sup>12)</sup>、③今後も継続して話し合いを持ち、互いの立場の差異と共有内容の確認、④登校刺激の制止の4点を確認し、学校側も了解。今後も連携を密にすることとする。

母は当初、三者で話し合いをすることに緊張していたが、教頭より「学校としては登校出来るまでゆっくり待ちたい」と話されてからは打ち解け、これまでの経過と、小学校側との間にあつ

た葛藤などを、涙を流しながら話す。学校としても長女の友人からの情報のみであったのが保護者と筆者と連携を組めることに安心している様子が見受けられた。筆者からは、学校に対して子どものみならず、親も不安定な状態にあり、小学校時代は長女が言語表現が未熟なために、自分の気持ちが十分に言い表せず、学校も本人の気持ちを理解できず困っていたこと、親も具体的な学校側の対応方法を出ず学校に焦りを感じたことを説明し、この問題は家族全体を揺らす問題であることを理解してもらった。

その後、不登校をネガティブに見る祖父母と両親は次第に対立していく。ワーカーや学校と連携が出来上がりつつあると思う両親も、祖父母に対してこれまでとは違った頑なな強硬な態度をとるようになり、一つの家庭内に曾祖母・祖父母の家族、両親を中心とした家族という2つの単位が出来上がり、子どもの奪い合いも見られた。妹は祖父母に引き寄せられ、長女と弟は両親のそばにいる家庭の形態になっていく（34回目）。

7月、夏休み直前、両親と共に学校訪問（中学校アウト・リーチ二回目）、学校側は教頭・学年主任・担任が参加。長女の安定した状況の報告と、夏休みの過ごし方（学校からの夏休み中の生徒への注意の確認など）について話し合う。

## 〈2学期の支援〉

### ● 家族間混乱解消のためのアウト・リーチの開始（36回目～38回目より）

夏休みは変わりなく「弟や妹とか、誘いに来る友人と遊んだりしています」（36回目）と母より報告あり。祖父母との関係は相変わらず、うち溶けてはいない様子。8月中旬、学校訪問（中学校アウト・リーチ三回目）。母より夏休み中の生活を学校に説明あり。学校と両親と筆者と一ヶ月の割合で定期的な話し合いを提案したところ、学校より、今回の事例を契機に「学校としても不登校の勉強をしたい」と述べられる。母より「学校が親身になってくれていることが判る」と学校への印象を語る。

8月下旬、母よりTELあり。先ほどまで祖父が「出刃包丁を持ってこい！」と祖母に怒鳴っているとのこと。「今は部屋に引っ込み寝ています」。最近の過程の様子は祖父母と関わりを持たないでいる。仕事が不定期なので祖父母は金銭的に困っているだろうと母は言う。家庭全体がギクシャクしている印象。

両親、来所。祖父の行動の原因について聞くと、祖父から可愛がられている長女の弟が祖父の言うことを聞かなかったためらしい。酒も飲んでおり、唯一可愛がっていた孫が言うことを聞かないことで感情的になったらしい。両親に筆者として祖父母に会いたいこと、この問題には祖父母の協力を必要とすることなど説明する。筆者が家庭訪問して祖父母と面接できるよう仲介を依頼する（37回目）。

両親の仲介により、9月上旬家庭訪問（家庭アウト・リーチ一回目）。

居間に通されて始めに筆者が見たのは、障子の棧の破損と障子紙の破れで、これは「長女がか



んしゃくを起こして破いたものです」と母が言う。

両親・祖父母・筆者と面接。折り目正しく、話す内容もしっかりしている祖父。建築関係の仕事をして、職人氣質の難しさは感じるが、以前に入っていた情報の〈アルコール好きの変わり者(母談)〉という印象ではなく、真面目で融通が利かない感じ。祖母は長年農家をしながら家を守ってきた物静かな主婦で、社交性にやや欠けるという印象。筆者から長女のことにについて担当していることを説明すると「ご苦労様です」と丁寧にあいさつし、筆者の訪問を歓迎している様子である。祖父に対して長女の今の状態の率直な感想を問うと、自分ではどうしても出来ないことに無力感があり、『酒を飲まずにいられない』と涙を流しながら語る。「運転していても、仕事をしていても(孫のことが)気になる」「機械を扱う仕事なので、(事故を起こさないように)注意をしている」と神経質になり、「(心配の余り)何か事故を起こすのでないか?」と、不安の気持ちが言葉に表れている。祖母は長女就寝時間を気にしている。祖父母は自分の認識や価値から理解できないで混乱している様子。祖父母にこれまでの苦労をねぎらい、家族全員が混乱を起こしているのは家族全員が頑張っている証であること、長女は学校を休んでいることに対して、後ろめたさや引け目をかなり強く持っていること、従って、家族や学校の先生が休んでいることを批難・叱責したり、強過ぎる登校を促したりすると二次反応を起こすことを説明する。

さらに筆者からのお願いとして、混乱している両親を祖父母に支えていただきたいことを依頼する。祖父母の表情に拒否的なものが見えないが積極的な協力の言動もなかった。しかし、「たびたび筆者が(この家庭に)訪問したい」と言う。「毎日でも来てもらいたいです…。」と祖父の返答あり、筆者を肯定的に見ている一面もある様子が伺えた。

#### 安定を模索するためのアウト・リーチ (39回目～42回目より)

9月上旬、学校訪問(中学校アウト・リーチ4回目)

両親と共に家庭訪問の印象を報告。教頭・学年主任・担任に祖父母の印象を報告し。これまで強すぎる登校催促があり、本人も反応をしていたが、今後は長女の問題には認識を一致して当たれるよう努力することを説明。今後とも両親が中心になり長女に対応することを伝える。また、祖父母も従来の価値や認識から不登校という現代の問題には理解するのに時間がかかるので、今後少しの両親の混乱が少なからずあることも了解してもらう。

母来所。今は家庭では長女の話はまったく出ない由。特にトラブルはないが、祖父母との溝が埋まってきている感じではないとのこと。ただ、以前のような大きな声をあげたり、不貞腐れた態度は見られない(39回目)。又、「娘が声優になりたい。どうしたらなれるか」と聞かれて困っています(40回目)。クリニックには定期的に一ヶ月一度通院。カウンセリングを受けるも、本人より「学校の話が出るのは嫌だ」と母に行った由。医師に伝えたら、気持ちが楽になるために(カウンセリングを)受けるのだから、嫌ならはっきり言わなければ…と指導を受け改善し、通院は続行している。



10月、家庭訪問（家庭アウト・リーチ2回目）祖父・祖母が既に居間で筆者に話す。前回より緊張が柔らかくなっているという印象。学校に行っていない問題にも前回のような不安と焦燥感はない。むしろ、自分の娘と婿との生活のあり方の不満がワーカーにいう。その話題の中には金銭的なことや家の継承等の事が見られるが、その話す姿には若い夫婦への遠慮や自分の無力を感じているように見える。

両親、来所。「長女は薬（安定剤）を飲み、昼夜が逆転し部屋でお菓子を食べるなど好きなようにしています（42回目）」、「（祖父母から）学校に何故行かない？いつ行くんだ？」など聞かれなくなった、と安心した様子で長女が言ってきたとのこと。長女の生活のあり方に各人が認めはじめている印象。

その後（43回目）

学校は定期的に両親・筆者と話しあい情報を得ていることで、ある程度、事態の推移を見守ることが出来るようになってきている。祖父母はこれまでの主観的な不安を強く持っていたが、筆者の家庭訪問から学校の考えも理解することによって、安心をとりもどした。両親は長女の問題に気持ちを集めて対応が出来るようになるなど、不登校を取り巻く環境の中の不安が、アウト・リーチ技法を取り入れることにより状況が変化している。家庭や学校における不登校支援の体制が構築されつつあり、現在はそのような形で経過中である。

### III アウト・リーチで克服した4つの課題

実際に不登校と直面した時、両親は不登校の意味するところ、祖父母の理解不足、学校との連携、子どもの閉じ籠りなど不登校の子どもを持つ両親は多くの課題に対応しなければならず、そのことに混乱する。アウト・リーチは次の点の克服に貢献した。

#### 1) アウト・リーチにより発見される「不登校の意味」

一番目に、不登校へのかかわりは、生徒からの動きをただ待っているだけでは、問題解決や接触の手がかりをつかむことが難しい。アウト・リーチ最大の特色は不登校問題の解決の為、ソーシャルワーカーが学校や家庭に出かけ、教員・家族・本人と会い、とかく陥りがちな責任の押し付けなどの調整や、学校と家族の調整役を務める役割をもつ。

生徒の生活場面である学校や家庭に訪問することによって、相談室内では見るものの出来ない人間関係、地域内での動き、更に学校・家族・生徒のもろさ、強さなどを感じることが出来、「何に苦しみ、悩んでいるか？」を肌で感じとることが出来る。

事実、今回この事例が本人もしくは学校との関係で生じたものと見ていた家族が、アウト・リーチの経過の中で、子どもの養育権が実際は祖父母がにぎり、その様な家族関係の複雑さにおよび

ている本人を理解できた。又、子育て不安を持つ親から自立しようと思ってみたものの、その想いを伝える術を知らない本人であったり、家族に本音を語らなかつたりしている子であることを理解し始める。不安を共有できるものが見出せないで困っている子は、やがては仲間を避けがちになり、仲間の集まりである学校にも親しみが持てなくなることが不登校状態の意味することであり、それらの子ども達を救済することに策がなく困っている担任にコンサルテーションをすることによって、本人のみを見るのではなく、周囲の友人関係を包み込み、環境の問題と前向きに担任は考えられるように変化した。アウト・リーチから家族の変容の期待が可能になり、そのことで両親をはじめとした家族全体に〈不登校の意味すること〉の理解が可能になる。

## 2) 家族の葛藤回避に有効な訪問支援

二番目に祖父母の理解についてであるが、子どもが不登校に陥ってから家庭内や家族関係に生じる問題は、兄弟関係ばかりではない。その親と同居する祖父母との関係にも複雑な問題が生じてくる。本事例においても、部屋に閉じ籠り、テレビを見、漫画本を読んでいることに絶えられない祖父母が『学校にいつ行くんだ?』『どうして学校にいけないんだ?』と不平や文句を言い続けていた。時代の価値観、認識の違いが大きすぎ、移り変わりが激しく、時代の急激な変遷をしている我が国で、不登校問題を祖父母に能動的に理解することを要求することは致難であり、この問題には両親が子どもに時間をかけて付き合うような作業をしているように、同様の時間掛けを両親は祖父母に対しても必要であろう。両親の並々ならぬパワーの継続性が求められるが、そのような意味でも家族療法的技法を伴いながらのアウト・リーチは有効な技法である。本事例では不登校という問題を理解することの困難な祖父母が、ワーカーの訪問や、学校の対応の報告をされることにより、とりあえずの落ち着きを回復し、家族内葛藤（特に両親と祖父母）は回避されている。

## 3) コンサルテーション機能の発揮

三番目の学校との連携であるが、現在の学校制度の中で不登校児童への対処は、一部の学校を除いて、決して体系的に持ち合わせているわけではない。今回はワーカーのアウト・リーチにおいて教頭、学年主任、担任との継続的な話し合いに応じてもらう体制が出来ており、その場面を見ている両親が安心し、一次的にせよ学校（小学校）に抱いた悪感情は三者（両親・学校側・ワーカー）の話し合いで改善され、我が子の問題に再び両親のパワー回復に貢献することが出来るようになった。学校側としても継続的な話しの実例から、不登校問題の理解や対応方法を学ぶことにより、校内の共通認識の体制が出来、そのことが両親の信頼を勝ち取れるようになる。

## 4) エンパワメント効果を持つアウト・リーチ

四番目に子どもの二次症状であるが、不登校を示す青少年が家庭内暴力を呈す場合、不幸にも

幼少時から過度とも言えるほどに親自身の自己愛を満たす担い手として育てられている状況が多く<sup>14)</sup>、不登校が長期化するに連れ、親の悩みとして子どもの閉じ籠り・神経的症状など二次的症状ははっきり出てくることが多い。このことで母親自身も一時的に不安定な状態を呈するほどである。その状態に『家への閉じ籠り』があるが、それにとどまらず、子どもへの強すぎる登校催促には二次的症状として、『部屋への閉じ籠り』<sup>15)</sup>がよく見られる。これらは子ども自身の劣等感や後ろめたさなどの感情をカバーし、理解してくれない大人への自己防衛であり、窪みの中に潜んでいる状態である。平井は『彼らは登校拒否という症状の中で、自主性の発達を遂げる…』と主張しており、アウト・リーチはそのような閉じ籠りや神経症的症状の意義を次のステップである『回復期』『再登校期』に向けての準備期の備えにも効果的手法と言える。それを契機に家人が共通認識を持つことにより、周囲の大人の過干渉、過保護の度合いを内的に反省する機会をもつことが出来る。

#### IV 考 察

以上により何点かの考察が見られた。

##### 1) アウト・リーチ固有のアプローチ

以上の事例から、アウト・リーチのアプローチの固有性について説明する。

ソーシャルワークの基本として「個と環境の調和」ということがある。多くの文献で紹介されている通り、ソーシャルワークは本人のみの変容を期待するものではなく、本人と周囲の人々や環境との関係の在り方が、相互に作用していると考える。個人の訴えに共感すると共に、取り巻く環境の状況を捉えることによって、より深く問題を深く理解することが可能になる。

本事例においては学校にアウト・リーチをかけ、教員が本人の人物像をどのように捉えているかを得ると同時に、教員とワーカーの連携の糸口をつける試みを行った。家庭にもアウト・リーチを行い、本人の家庭での様子、興味は何か、あるいは現在及び過去の人間関係に関する情報を得る。時に、両親と学校の不登校に対する、理解の差異の部分が見られた場合でも、それを修正することなく確認するのみで、学校と連携が取れるという意味でもアウト・リーチの役割は大きい。

##### 2) 家族の変化 1

ソーシャルワーカーの行うアウト・リーチ（訪問先）での家族療法は、対象者の生活場面である家庭に赴き行われる。家族成員の言い分を平等に聞くという手法である。従って、時に両親への肩入れがあったり、今回の事例のように祖父母の訴えを聞くことに終始したりすることもある。これらは世代間の境界の確立、世代間の役割の復活など家庭内の活性化に有効である。このこと

は祖父母や両親が『変わる』ことを期待しているのであり、祖父母や両親を『変える』こととは異にしている。

本事例のように家に閉じ籠り、コンタクトが取れなくとも、アウト・リーチと生活場面面接の組み合わせによって、母は精神的な負担の軽減を図ることが出来、初期段階の母親の安定に役立つことが出来た。

アウト・リーチは当初、祖父母との関係調整や、祖父母の不登校の正しい理解を目的としていたが、それらの達成の他に、母親としては回数を重ねられ、互いに定期的に話しが出来る相手を持つことにより、不登校に対する罪責感が薄められ、不登校の持つ意味がより理解された。

また、変化が顕著であったのは、多忙で家庭のことを振り返る暇がないほどであった父が、ワーカーのアウト・リーチに刺激され、この問題に対応し始め、結果的に母・子どものそばにいる時間が多かったことである。その結果、祖父母の過干渉や行過ぎた指導が潜め、子どもの養育権が両親に戻り、世代間の境界や役割も明確になった。

当然のことながら、子どもは休み始めた時、見守りの時など時間的に子どもの動きは変化する。祖父母や両親の役割分担、本来の母親の落ち着きと父権が戻る時、長女を始めとして弟・妹などの子ども自体にも自分のペースをつかみ始めることが可能となる。

### 3) 家族の変化2

#### 何を育てるのかの理解

白橋は児童の学校の適応状態と登校意欲に触れながら、「学校の適応状態がいいからと言って学校へゆくとは限らない……。逆に……学校の適応状態が悪いからと言って、学校へ行きたくないかとも限らない。すると、学校とは何なのか……学校というのは子どもの人格形成の上で重要な役割を占めるべき場でありながら、子どもの適応状態と学校へ行きたいという子どもの感情との間には相関関係がないとすれば、学校そのものは一体子どもに対してどういう意味を持っているのか……」<sup>16)</sup>と学校の意義について警鐘を鳴らしている。この事は家庭と学校のほかに、児童生徒の内面的な部分にアプローチをしなければならないことがわかる。スクールソーシャルワーカーが心理職と共にそれらの問題に対応を迫られるテーマでもある。それは大人、特に両親が、子供の何を育てるのか？ 不登校を起こしている子どもの家と学校の距離の長さの溝を、育てる者としての役割を協働して支援することになる（今回の事例では心理職との連携が課題として浮き彫りになった）。

アウト・リーチは学校や家庭に赴き、それらのコーディネーションも行い調整を図る。そのような観点からも、不適応児童への支援には、家庭と学校の連携・調整を行いつつ、ソーシャルワーカーとして、具体的な細やかな問題について相談支援を行い、時間をかけて家族を支え、周囲との連携を取り扱い、親の考える「子どもの何を育てるか」の方向性の確立に協力する。



#### 4) 間接的支援

アウト・リーチは子ども本人に対する直接的支援を必ずしも必要としてはいない。むしろ、支援で大切なことは、子供の問題に両親が揃って立ち向かう事が出来るような支援をする事、学校との危機的状況が生じた時でも、両親そして担任教師との連携の保持に努める事、状況の整備と改善にあることなどが事例から証明される。不登校に陥った子どもらは、周囲に後ろめたさや、引け目を感じていることが多く、彼らの閉じこもりは再登校の準備期と理解し、アウト・リーチで環境の整備に焦点を当て、整備されたときの子どもの再登場を待つ。それらの働きかけはソーシャルワーク実践である。

#### 5) 学校とのかかわり

ソーシャルワーカーは学校に適応することに困っている子どもに対する支援にとどまらず、学校訪問（アウト・リーチ）を通じて、学校生活での過ごし方、学級内の人間関係や日常の教育環境の把握し、教師に対して休み中の関わりかた、友人を介して生徒へ配る書類の渡し方、親との三者面談のあり方などコンサルテーションなども行う。

学校への訪問は、始めは不定期ながら頻回に訪問したが、後におよそ一月に一回を目安とし、面談終了時には次回の協議事項と日時を決めるようにした。内容は状況の報告、家族や本人の意向を伝え、意見の調整が主である。

学校場面でのアウト・リーチの功罪は今回の事例に見ることが出来た。小学校では子どもの内面性に焦点を当てる教員と、学校場面や環境への配慮を主張するワーカーとの意見の食い違いが両親を困惑させることになった。中学校においては教員が日常の業務に追われたり、科目によって違う教員の授業形態で十分なかかわりが出来なかったり、時間の制約もあり、関係者が一堂に集まることで情報の共有することに積極的であった。実際例として教員に対してコンサルテーションや家庭との調整などが行われ、学校を当事者として含み、学校側の関心を持続させるよう展開することが出来た。そのことが両親の安定につながった。

#### 6) 地域とのかかわり

不登校は外部との関係を絶つことが多い。本事例では学校からの連絡を友人にお願いし、平素より、遊びなどで地域の人らとの交流や子ども達同士でカラオケに行くなどがあり、二次症状の改善に大いに役立った。精神的な揺れがあり、不眠と昼夜の逆転が見られたときに、医療機関に受診し心理職のカウンセリングも行われ、それが学校以外の機関との接点と言える。又、学校以外の機関として近くにフリースペースがあるが、それらを利用することで子ども達の元気回復など成果が見られるが、時に、学校からますます距離感が遠くに感じることで、心理的に友人から離れることになること、さらに新しい人間関係の再構築への不安などの課題も残る。

## お わ り に

## アウト・リーチという継続した支援の有効性

アウト・リーチは不登校により起きた様々な問題の状況改善に向けて、個人や家族の支援のみならず、子ども達のもう一方の生活場面である学校へのサポートを連続的に行う。親は昼近くまで寝ている子どもへの接し方が判らず、学校に行かない時の日中の過ごし方や学校とのコンタクトの取り方等々、具体的な助言を願っている。学校は子どもとの適切な対応を求めるものの、十分な情報も持たず、学校生活に要因も見出せず困惑している。このような時、スクールソーシャルワーカーが家庭や学校の子ども達の生活場面に訪問することで、連続的な支援で潜在的に隠れていた問題が表面化し、各自の理解と状況の再認識で相互的な前向きさが期待できる。始め弱々しかった家族であったり、実務的な活動が見えない学校であったが、生活の場での面接を展開することにより、意外な力強さを表したり、セルフケア能力や環境条件の把握などアウト・リーチの効果が見られた。アウト・リーチについてはチャールズ・A・ラップ<sup>17)</sup>も利用者の環境の中に、利用者の興味、能力、強さがあり、果敢な地域訪問は、好ましい介入法であると述べている。

このように子ども自身のニーズの聞き取りと支援のあり方を、本人や家族と共に検討し、親の不安の支えとなり、相談援助をしたり、関係調整をしたりしていくには継続的な家庭訪問（アウト・リーチ）が有効である。特に、一度両親の登校刺激が信頼を失ったにもかかわらず、学校とワーカーが連携をとりながら、継続的な支援として家庭訪問をした役割が大きいと推察出来る。

## 註

- 1) 児童精神科医として、長い間、児童のあらゆる問題に携わり、筆者も不適應問題において教授された。
- 2) スクールソーシャルワークの歴史は、世界的にはセツルメント運動時代にさかのぼり、その発祥はアメリカのニューヨーク、ボストン、ハートフォードとされ、従って、100年以上の歴史を持つソーシャルワーク業務の一領域として認められていた。
- 3) 内田宏明「日本におけるスクーソーシャルワーク前史」『スクールソーシャルワーク論』vol. 3, 学苑社, p. 40～44 2008年
- 4) 岡村重夫『社会福祉学（各論）』柴田書店 p. 163 1963年
- 5) 阿部正孝「スクールソーシャルワークの有用性についての一考察」『東北福祉大学紀要研究』第32巻 p. 1 2008年
- 6) 山口桃子「高校での中退・進路問題をめぐる学校ソーシャルワークの取り組み」『スクールソーシャルワーカー養成テキスト』中央法規 p. 160 2008年
- 7) 世話人役で、話しあいや協議の場を持つとき、協議に必要な場所や人のセッティングなどをとする。
- 8) コンサルテーションはカウンセリングと違い、相手のパーソナリティには踏み込まず、助言、情報の提供などをする構成技法。
- 9) 富田和巳『学校に行けない/行かない/行きたくない』へるす出版 p. 12 2008年
- 10) ソーシャルワーク開始の局面に使われる概念で、筆者はインタークと区分けして対象者との

ソーシャルワークを行う上で、インテーク以前の大切な関わり性という考え方で重要視している。

- 11) アウト・リーチは専門家が地域に出向きサービスを必要としている人に、利用できるサービスの情報提供などを行う。
- 12) 渡辺位（元国立精神・神経センター国府台病院精神科医長）は登校拒否処遇の三原則に① 子どもの意志や感情を無視し，説得，叱責，体罰を加えること ② 子どもが学校へのこだわりから脱却できるように援助すること ③ 不登校をネガティブに評価しないことを『青年期の精神科臨床』金剛出版 1989 年 p. 53 であらわしている。
- 13) 二次反応は不登校児童に強い登校刺激を与えると起こす反応。閉じ籠り，家庭内暴力，心身症・神経症的症状などがある。
- 14) 堤 啓「不登校と家庭内暴力」『精神療法』金剛出版 p. 16 1993 年
- 15) 梅垣弘『登校拒否の相談指導』糧/篠原出版 p. 64 1996 年
- 16) 白橋宏一郎「児童の精神衛生—登校拒否を中心に—」『創立記念公開講演集協会 25 周年の歩み』p. 71 1989 年
- 17) チャールズ・A・ラップ『精神障害者のためのケースマネジメント』75 頁（金剛出版，1998 年）